

## 中国人留学生の日本語ディクテーションにおける誤答分析

### An Analysis of the Errors that Chinese Students make in Japanese Language Dictation

仇 晓芸

QIU Xiaoyun

#### 要旨

本稿は2015年度、生活情報学科の編入三年生の中国人留学生を対象に、新聞やニュースなど日本語のディクテーションを実施した際に見られた誤答項目を分析するものである。留学生の大半を占める中国人留学生が日本語のディクテーションのどのようなところでどのようにつまづいているのかという実態を明らかにし、先行研究で指摘された観点との異同を検討し、より良い日本語教育を展開するための対策について探った。中国語母語話者特有の問題に焦点を当て、考察を加えることを目指した。

#### 1. 背景と目的

##### 1.1 背景

筆者は2015年から本学生活情報学科三年編入の留学生の「生活情報プレゼминаール」という通年の授業を担当するようになった。2015年度は11名の中国人留学生が受講し、うち、10名が漢民族で、1名がウイグル族だった。授業では「聞く・読む・話す・書く」の四技能をバランスよく授業の中に取り組みことを意識して授業に臨んだ。その中で授業では特に「聞く」ことに焦点を当ててみることにした。それには二つの理由がある。一つは筆者自身の外国語としての日本語学習歴を振り返った時、ディクテーションが非常に役に立ったという記憶と実感があったからである。もう一つは日頃、「○○の授業で言っている日本語の意味がわからない」という留学生の声を耳にしているからである。その意味においてもまずは情報のキャッチ、聞いて理解することが大切であると改めて思う。この二つの理由から「聞くこと」に焦点を当て、一般的に学習効果が高いとされている「ディクテーション」を通して、中国語母語話者の学習者が実際よく間違えている日本語の詳細について分析してみようと考えた。

##### 1.2 目的

上記の背景を踏まえ、本研究はまず留学生が日本語のディクテーションでつまづいている部分、聞いて

てわからない部分、分かっているけど書けない部分、苦手だと思われる分野を明らかにする。中国人留学生のよく間違えている日本語の詳細、パターンについて知ることができたら、学生がもっと具体的な勉強の方向性を見つけやすくなるだろう。それと同時に、教員にとってもメリットがある。もっと留学生の大半を占めている中国人学生の苦手分野への理解を深め、それらを抑え、補強できるような教育内容を実現することができる。

本研究は先行研究で指摘されている観点との異同について検討し、ディクテーション活動を通して見えてきたものを述べ、中国出身の留学生がつまづきやすい部分に焦点をあて、示唆を与えることを目的としている。

なお、本研究は本学の2015年プロジェクト研究費の助成を受けたものである。研究期間は2015年4月～2016年3月までの一年間であり、予算は156,000円である。

## 2. 先行研究

### 2.1 ディクテーションの学習効果

外国語学習にディクテーションが有効であることについて、これまで様々な研究が行われ、日本語教育においてもディクテーションの有効性が指摘されてきた。小河原・高橋（2013）は音声刺激をそのまま書き取るというディクテーションの特徴に着目し、既有知識と音声を結びつけるという点で日本語学習に役に立つと述べている。また、杉浦ら（2002）はディクテーションを「リスニング能力の養成のための自律的学習法」として捉え、調査に基づき、ディクテーションがリスニング・トレーニングにおいて効果があると主張している。

また、既有文法知識との連動という視点で、小河原・高橋（2013）は、ディクテーションにはステップのような順番があるとし、初めは聞き取れないものでも授業が進むにつれて部分的に取れるようになったと報告している。また、ディクテーションによって意味を理解するための手掛かりが増え、既有文法知識と連動させて聞き取れなかった部分を補い、内容の理解を促しているとも述べている。

### 2.2 中国人学習者の特徴

中国語を母語とする日本語学習者には、中国語に存在しない日本語の助詞、長音化、促音化などモーラに関係する現象をはじめ、「語彙」、「文法」、「音声・音韻」などの面において様々な問題が見られる。

#### 2.2.1 語彙

##### 2.2.1.1 一般語彙

漢語名詞を別の漢語名詞に変換するという観点から常木・小野（2001）は中級レベルの中国人学習者が未知語に対処する時、どの程度漢語の知識に頼っているのかについて特に名詞に焦点をあて調査した。その結果、主に下記2種類を分けている。

(1) ある漢語名詞を別の漢語名詞に変換

常木・小野（2001）によると漢語名詞の誤変換は二つに下位分類される。

①「臨時」(正) → 「認知/民事/人事」

上記のように、自分の推測によって似たような音構造をもつ既知語を答えたということが考えられる。この場合、音構造の類似性があるものの、文全体の意味は異なったものになる。常木・小野

(2001)はこのケースを「音を媒介として回答を導き出したもの」と呼んでいる。

## ②「救出」(正) → 「救助/救援」

上記のように、文脈の意味から推測するものもある。この場合、学習者は語の一部を聞き取り、自分の心的辞書から該当すると思う語彙を選んでいると考えられる。したがって、このケースでは音構造の類似性は見られないことが多い(常木・小野2001:13)。このケースを「漢字を媒介として回答を導き出したもの」と常木・小野(2001)は呼んでいる。

## (2) 既知語と未知語の表記の違い

既知語の場合はほとんど漢字表記で、未知語の場合は平仮名で書かれることが多いと常木・小野(2001)は述べている。例えば、「浮き彫り」という語彙が既知語の場合「浮き彫り」と書き、未知語の場合「うきぼり」と書く。なお、未知語に対して、常木・小野(2001)は「音の受容ができて聞いて理解して、かつ正確に使うことができない」というこれまでの傾向(フォード1992)を示唆しているという。つまり、音声をなんとか聞き取り、「うきぼり」と書くことはできたが、意味はわからないということである。

その他、田代・中込(2002)は、漢語の知識が日本語理解の大きな手掛かりとなっていることを指摘し、漢語知識の大切さを述べている。

### 2.2.1.2 外来語

村松(1999)は「外来語」は中国語母語話者にとって難しいと指摘している。とりわけ、聞き取れない単語の後ろに助詞が続くと、単語と助詞の区別が難しいようである。(例:「フライと」と「フライト」)

### 2.2.1.3 漢字問題

漢字について魏(2013)は、次の三点を報告している。①日本語の漢字と中国語の漢字は似ているものが多いと言われているが、日中両言語の漢字が必ずしも一致するわけではないとし、②中国人学習者は母語中国語の影響で誤った類推が生じやすいこと、③聞き取りや会話などの場面で日本語の処理能力が比較的弱いことを指摘している。

## 2.2.2 文法

元田(2014)は中国人学習者の「個別の発音問題」や中国語の「形容詞+の」(例:“好喝的茶”→「おいしいのお茶」)、助詞の脱落という現象が見られると報告している。「は、が、に、で、を」など日本語の助詞は中国語に存在しないため、助詞の聞き取りは中国母語話者学習者にとって一つの学習上の難題である。常木・小野(2001)もこのような母語の文法的干渉を原因として指摘をしている。

また、フォード(1992)は中国出身の学習者を含めた中・上級の学習者を対象に、ディクテーションの困難点を探り、「形式名詞」(例:～ようなN、ところ)や「補助動詞」(例:～ていく/～てくる)などの項目に誤りが多いことを報告している。

## 2.2.3 音声・音韻

日本語のモーラ(拍)に関係することで、村松(1999)は中国語を母語とする学習者が長音の間違いを繰り返していると報告している。その他、濁音と半濁音、促音、送り仮名に関しても誤りが多いと指摘している。

また、山本(1997)は次の二点を指摘している。(1)音韻体系の違いによって、日本語の破裂子音

の有声対無声、すなわち「パ行－バ行、タ行－ダ行、カ行－ガ行」の区別が中国人学習者にとって難しい。(2) 韻律やイントネーションの角度から中国人学習者は母語の影響で日本語を発音する際、「きつさ、強さ、激しさ」を感じさせてしまうような問題がある。

### 3. 実施の詳細

#### 3.1 ディクテーションの素材

ディクテーションの内容は主に2015年の4月～2016年の1月までの朝日新聞とNHKのニュースから選定していた。できるだけ日常生活の中で使用頻度が高いもの、これから学生が使う可能性が高いと思われるもの、学生が間違えやすそうなもの、就職してからも使える可能性があるものを中心に選んだ。新聞記事とNHKのニュースを対象にしている主な理由は、日頃よく触れるもので、このレベルのものを聞いて正確に書けたら、大学でのレポート・卒論をはじめ、日本語での文章作成力、書く能力が引き伸ばされやすいと思ったからである。

形式として、主に「単語」、「フレーズ」<sup>1)</sup>(例：「影響を及ぼす」、「激戦が繰り広げられる」)、「文」といった三種類のものを実施した。「単語」は語彙量を蓄積し、語彙力を豊かになることに役に立つだろう。「フレーズ」と「文」は語彙と助詞をセットとして覚え、語彙と助詞のつながりを良くする役割があり、外国人学習者の助詞の乱用を防止する意味があると思った。(例：「プロジェクトに加わる」、「～と呼ばれている」)。毎回、8つの項目がある。以下表1は2015年11月11日の授業で実施した8つの項目である。

表1 ディクテーション項目 (2015年11月11日の実施内容)

1	テコ入れ
2	経済関係の強化
3	合意する見通し
4	人民元の取引拡大
5	最大限の配慮をした形
6	上下関係にとらわれない実力主義
7	カリフォルニアで過ごした学生時代に遡る。
8	政府は公式的に人権問題に触れずでいた。

#### 3.2 実施方法と学生への指示

3週間に一回、毎回10分程度の時間を取っていた。半期15回の授業のうち、5回の実施で、一年間、合計10回の実施があった。毎回、授業の前半で10分程度を使ってディクテーションを実施した。全部で8つの項目をディクテーションした。一つの項目は2回読み、1回目はややゆっくりの速度で、2回目は普通の日本語の速度で音読した。長い文の場合、分節を意識して読み上げた。学生には聞いた日本語を書いてくださいと伝えた。漢字が書けない時、ひらがなでも大丈夫であること、できるだけ空欄がないように、また、提出する前に自分で一回確認することも付け加えた。

### 3.3 受講者の日本語レベル

11名の中国人留学生は本学の留学生別科と短大から編入した学生である（表2）。編入されるまで本学の留学生別科と短大で1年間ぐらい日本語を勉強したことのある留学生が多い。さらに、来日する前に中国の教育機関で何らかの形で日本語を少し習ったと言っている学生も少なくなかった。しかし、実際、日本語で話しをしてみて、通じる程度で言うとかかなり個人差があった。中に、学外の日本語学校で日本語を習い、本学の短大に入学した学生もいた。

留学生の日本語能力は表3に示したように、ほぼ半分（5人）の学生は日本語能力試験（JLPT）のN2を持っており、ほぼ4割（3人）の学生はN1に合格している。日本語能力試験（JLPT）とJ.TEST 実用日本語検定は異なる性質の試験であるが、N2合格者はJ.TESTで600～650点、N1合格者はJ.TESTで680点～800点に相当することが多いようである。

表2 受講生編入前の所属

3年編入前の所属（11名）	
本学の短大	3名
本学の留学生別科	8名

表3 受講生の日本語能力

日本語能力試験（JLPT）	N1合格者	3
	N2合格者	5
J.TEST 実用日本語検定	720点	1
	650点	1
情報なし（調査当時）		1
		計：11名

## 4. 誤答の分析と結果

11名の中国人留学生がディクテーションしたものを分析し、その結果を先行研究で指摘している内容と照らし合わせた。その結果、先行研究で指摘されている現象が見られたものとあまり見られていないものがあった。表4は詳細を示している。

表4 先行研究と本研究の分析結果の対比

先行研究で指摘している問題点	筆者の分析結果から見えたもの
2.2.1 語彙	
(1) 一般語彙	×
(2) 外来語	○
(3) 漢字問題	○（*更に発見あり）
2.2.2 文法	×
2.2.3 音声・音韻	
(1) 長音	○
(2) 促音	○
(3) 濁音&半濁音	○
(4) 送り仮名	×

「○」：本研究で見られた現象、「×」：本研究ではあまり見られなかった現象

「語彙」の中の外来語問題と漢字問題、「音声・音韻」の中の長音、促音、濁音&半濁音の現象が見られた。一方で、「語彙」の中の一般語彙のミス、助詞などの文法問題、「音声・音韻」の送り仮名に関する問題があまり顕著に現れなかった。

#### 4.1 本研究で見られた現象と今後の対策

##### 4.1.1 カタカナ

村松(1999)で指摘された通り、カタカナは中国人学習者にとって一つ代表的な苦手分野であると言えるだろう。部分的な間違いをはじめ、語彙の一部が脱落する、平仮名と混同するというケースが見られた(表5)。これらの誤答から、カタカナの練習を強化することの大切さがわかった。ホテル(hotel)、ホステル(hostel)のように、日本語のカタカナと英単語の間に音声的な対応関係が存在していることを知らない留学生がいるのではないかと推測している。

表5 カタカナの間違い

	○ 正しいもの	× 誤答
1	カリフォルニア	カルフォルニア
2	メーカー	メーかー
3	マイノリティー	マノリティ

カリフォルニア(California)の「リ」について、もし「リスト(list)」、「リフト(lift)」や「リスニング(listening)」のように、「li」が「リ」と対応していることが多いということがわかれば、誤答をする確率はだいぶ減ると思われる。このように英語の発音を手掛かりにし、英語の発音と日本語のカタカナの間にある対応関係を探り、ある程度のパターンを把握することができれば、中国人学習者も少し「カタカナ恐怖」から救われ、だいぶ楽になると思われるので、英単語を媒体とする中国人学習者のカタカナ強化をしていく必要性がわかった。

##### 4.1.2 漢字問題—日本語の漢字の間違い

フォード(1992)が指摘しているように、音声聞き取れても必ず正しい漢字で表記しているとは限らない。表6で示したような間違いが見られた。

これらの誤答から、日本語の同音異義語に関する知識がまだ足りないことが浮き彫りになった。同じ発音で異なる意味を持つ単語が存在していることからスタートし、いかに学習者の語彙力を付け、心的辞書を豊かにしていくことが極めて重要である。

その他、学習者は母語である中国語の漢字と日本語の漢字を混同していることもわかった。この点について、4.2節で具体的に述べる。

表6 同音異義語の間違い

	○	×
1	この事業を始める。	この事業を初める。
2	人を惹きつける。	人を引きつける。
3	写真を撮る。	写真を取る。
4	中国側に最大限の配慮をした形だ。	中国側に最大限の配慮をした型だ。

(文中、間違いのある部分はイタリックで示している。)

### 4.1.3 音声・音韻

#### 4.1.3.1 長音

中国語にない長音の聞き取りは明らかに難しかったようである。表7は一部の長音に関する誤用の例を示している。その他、「ちゅうちょ(躊躇)」を「ちようちよう」、「げんしゆ(元首)」を「げんしゆう」と間違えた例も多数見られた。

表7 長音の間違い

	○	×
1	きょうか(強化)	きよか(許可)
2	じょうせい(情勢)	女性(じよせい)
3	くちょう(口調)	くちょ
4	スポーツカー	スポーツカ
5	チベット	チーベット

「う」の脱落が「音声・音韻」の節で最も顕著に現れている。また長音の「ー」が抜けたり、必要でないところに付け加えられたりしている例も多く見られた。「う」の扱いが苦手である学生が多かったことがわかった。日頃、日本語単語の中に「う」があるかどうかについてもっと注意を払う必要があるだろう。

#### 4.1.3.2 促音

表8 促音の間違い

	○	×
1	ティッシュ	ティシュ
2	湿った空気	湿めた空気
3	せっこうしょう(浙江省)	せこうしょう
4	がってん(合点)	がてん

促音も中国語にない現象であり、多くの中国人学生が苦勞していることがわかった。表8に示されたのは一部の促音に関する誤用例である。ディクテーションの他に、普段学生と接していて、例えば次のような語彙でもよく発音などでつまづいている。「こっち」を「こち」、「みつつ(3つ)」を「みつ」、「ぶっけん(物件)」を「ぶけん」、「よっか(4日)」を「よか」と発音している。学生に聞いてみると、小さい「つ」が入っている場合、「わかるもの」と「わからないもの」があり、「わかるもの」でも書くことになる小さい「つ」が抜けがちである。

#### 4.1.3.3 濁音&半濁音

表9は一部の濁音が抜けている項目を示している。誤用例を見ると中国語の有気音子音 [t] と無気音子音 [d] の発音と関係している可能性が否めない。中国人留学生にとって [t] と [d] の発音をもっと練習する必要があるだろう。特に [t] になりがちなものを正しく [d] に発音することが大事である。

この点に関して、留学生の中国語の標準語(“普通话”)のレベルとも関係しているのではないかと考えている。中国の様々な地域からやってきた中国人留学生の標準語を聞いてみると、必ずしも皆さんが正

しい標準語を話しているとは限らない。中になかなか矯正ににくい強めの方が言が抜けない学生も時々いるので、一部の学生は中国語の有気音と無気音の区別がつきにくいのも一つの事実である。より正確な日本語の発音を聞き取り、より良い耳を持つために母語中国語の標準語レベルの引き上げも重視すべきだと考えている。

表9 濁音 & 半濁音の違い

	○	×
1	かくだい (拡大)	かくたい
2	夢をいだく (抱く)	夢をいたく
3	さきだち (先立ち)	さきたち
4	ポーチ	ポーチ/プーチ

#### 4.2 本研究の独自性—日中漢字の混同とその実態

4.1.2節の漢字問題で中国人留学生在が日本語の漢字を間違えていることについて述べた。もう一つ漢字に関する問題点があった。それは魏 (2013) が指摘しているように、同じ漢字圏である中国人は必ずしも漢字について問題がないわけではない。誤用を分析していると、中国出身の留学生在が多くの漢字のミスをしていることが明らかであり、筆者も驚いた。それは予想外のことだった。

一部の誤用例 (表10) を見るとわかるように、漢字のことが得意だと思われがちな中国人学習者は日本語の漢字に相当苦労していることが明らかである。中国人も他の国の出身者と同様に日本語の漢字で苦労していることも言えるだろう。日本と中国、お互いの漢字同士が似ているからこそ難しく、書き分けが紛らわしい。日本語の漢字と中国語の漢字の共通点と相違点に十分気をつける必要性が言うまでもない。

表10 日中漢字の違い

	○	×
1	習近平	习近平
2	空気	空气
3	状態	状态
4	東京	东京
5	真剣に	真俭に

また、中国人学習者だからこそ気付いている日本語の漢字と中国の「簡体字」のわずかな違いがある。同じく中国出身の筆者も長い間苦労してきた。例えば、「骨」という字の違いに気付いたのは最近のことであり、筆者は今でも当時の驚きを鮮明に覚えている。上部の「口」のような部分の向きが左か右かの差で変わってくる。一部の日中紛らわしい漢字を表11にまとめた。これらの漢字の違いを理解することは学生と教員両方にとって大事である。

表11 紛らわしい日中の漢字

日本語の漢字：	營	愛	骨	底	低	動	実	習	囙	種	語	潔
中文簡体字：	营	爱	骨	底	低	动	实	习	囙	种	语	洁



さらに、漢字の違い以外に、単語を構成する漢字の配列順もわずかに異なっているところがある。すなわち、日本語では「AB」の順であるのに対し、中国語では逆の「BA」となっている。表12は集めた例の一部である。

表12 漢字の配列順が逆になっている単語

日本語：	平和	言語	情熱	施設	探偵	段階	紹介	面会	住居	運命	限界
中文：	和平	语言	热情	设施	侦探	阶段	介绍	会面	居住	命运	界限

表12に示したように、単語内部における構成漢字の順番が逆であることが特徴である。そこに気づき、この特徴を覚えながら語彙の数を増やしていくことが語彙力のアップに繋がるだろう。それは中国人留学生にとって語彙学習の一つのコツでもあろう。学生にいかにも日本語と中国語の間にある規則性、共通点と相違点、学習ポイントを示すことが大事であり、教員がもっと工夫をする余地があるだろう。

## 5. まとめ

### 5.1 ディクテーションの学習効果

10回の実施を終えた時、留学生たちは実施前よりだいぶ日本語のディクテーションに慣れた印象があった。新学期がスタートした4月、あまりディクテーションに自信のない留学生でも後期の後半1月になると前期よりだいぶ書けるようになり、恐怖心もだいぶ消えた。また、最初から積極的にディクテーションに挑んでいた留学生は更に進歩し、ますます書けるようになり、自分のミスが気になり、毎回全問正解になるようにと努力していた。

### 5.2 先行研究との異同、今後の対策

まず、先行研究で指摘されており、本研究では似たような傾向が見られていないのは、①「語彙」の中の一般語彙に関する間違い、②助詞の乱用といった「文法問題」、③「音声・音韻」の送り仮名に関する問題である。

次に、先行研究で指摘されており、本研究も同じ傾向が見られた現象について述べる。語彙に関して、村松（1999）が指摘した通り、外来語問題、カタカナが中国人留学生にとってハードルが高いことがわかった。対策として、英語の発音と日本語のカタカナの間にある対応関係をもっと明白に中国人留学生に伝え、第三の言語である英語を上手に使うことで、日本語学習にも良い効果をもたらすことを期待している。

漢字問題に関して、①日本語の漢字を間違えている、②日本語の漢字と中国語の漢字を混同しているという二つの傾向が見られた。①「日本語の漢字を間違えている」問題に対して、日本語の同音異義語の語彙量を増やす必要があることがわかった。②「日本語の漢字と中国語の漢字の混同問題」に関して、本研究は先行研究が指摘している内容よりさらに豊富なバリエーションを見つめることができた。「漢字に強くて、筆談でも通じる」とされがちな中国語母語話者の学習者にとっても日本語の漢字はハードルが低くないことが明らかになった。むしろ中国語母語話者だからこそ難しいと言える部分があると言っても過言ではないだろう。同じ漢字圏の中国語母語話者が持っている日本語の漢字に対する悩みは、「紛らわしい」という点である。この点は欧米など非漢字圏の日本語学習者が持っている「知らない」という悩みとはまた質が違うものである。今後の日本語教育の中でこの質の異なる悩みについて

特に注意を払う必要があるだろう。中国人留学生への漢字教育についてもっと深く掘り下げていく必要性がある。

また、音声・音韻の面に関して、先行研究で指摘されている①長音、②促音、③濁音&半濁音といった3つの現象が本研究でも見られた。日本語と中国語の音韻体系の違いによって、これらの問題が生じやすいと考えている。モーラ（拍）のある日本語の音韻リズムへの理解を深め、今後、音読練習の量を増やすことは一つの試みではないかと考えている。一方で、母語中国語の有気音・無気音などの特徴をもっと理解し、より正確な音を聞き分け、発音することができたら、母語中国語標準語の発音がよりキレイになり、外国語である日本語学習にもプラス効果をもたらすことができるだろう。

## 6. 今後の課題

本研究は中国人留学生を対象にディクテーションを実施し、先行研究と照らし合わせながら、学習者が見つめている日本語の現象について分析を行った。しかし、本研究が直面している課題は山積している。誤答の種類別の量的な集計をしなかったことが非常に大きな課題である。また、ディクテーション素材の選択、レベルの判定などの記述に大きく不足している。さらに、ディクテーションの内容を新聞記事やニュース以外のもも視野に入れてさらに広げる必要があるなど、問題点は多く残っている。その他、ディクテーションを実施する前に語彙リストを与えるかどうかを今後検討したほうがよいだろう。これらのことを今後の課題とし、考えていきたいと思っている。

### 注

- 1) 本研究では「影響を及ぼす」のような短い文を「フレーズ」と呼ぶことにしている。また、「台風は1時間におよそ20キロの速さで東へ進んでいて、気象庁は付近を通る船舶などに十分注意するよう呼びかけている。」のような長めの文を「文」として扱うこととしている。

### 参考文献

- 小河原義朗・高橋亜紀子（2013）「ディクテーションによる音声知覚トレーニングの実践と課題」『日本語教育方法研究会誌』20（2）pp. 60-61
- 魏娜（2013）「日本語の漢字語彙テストから見た中国人中級学習者の漢字語彙の処理の問題—視覚呈示と聴覚呈示の比較を中心に」『JSL漢字学習研究会誌』（5）pp. 41-48
- 杉浦正利・竹内彰子・馬場今日子（2002）「リスニング能力養成のための自律学習：ディクテーションの効果」『言語文化論集』23（2）、pp. 105-121
- 田代ひとみ・中込明子（2002）「語彙の手当てが講義の聴解に及ぼす影響」『日本語教育方法研究会誌』9（2）pp. 20-21
- 常木由布子・小野正樹（2001）「中国人学習者のラジオニュースの聴解における誤用分析：なぜ辞書が上手く利用できないのか」『日本語教育方法研究会誌』8（2）pp. 12-13
- フォード順子（1992）「聴解ディクテーションの「誤聴」分析—中・上級の文法の困難点を探る」『日本語教育論集』（7）筑波大学留学生センター pp. 45-64
- 村松由起子（1999）「ディクテーションと自己添削の問題点」『日本語教育方法研究会誌』6（1）pp. 52-53
- 元田静（2014）「日本語レベルが多様なクラスでの全文ディクテーションの試み」『日本語教育方法研究会誌』

21 (1) pp. 88-89

山本富美子 (1997) 「母語干渉による異文化間コミュニケーション上の問題—中国語系日本語学習者の中間言語分析より」『富山大学人文学部紀要』26号 pp. 225-237

